

## 後期高齢者一年生

藤田雄司

遊びをせんとや生まれけむ 戯れせんとや生まれけん  
遊ぶ子供の声きけば わが身さえこそゆるがるれ

よく知られた古典『梁塵秘抄』(りょうじんひししょう)の中に出てくる古謡の一つである。

歌の大意は、遊ぶために生まれてきたのだろうか、戯れるために生まれてきたのだろうか。無邪気に遊んでいる子供たちの声を聞くと、感動で自分からだまで震えてくる、というようなところである。

六十五歳で完全リタイアした時に、仏教について学びたいと通い始めた大

学で、たまたま目にして、虜になってしまった歌である。

大学卒業以来四十年間続いていたツトメが全く無くなると、あとはアソビ以外にすることが無くなる。好きなことがやれる理想の人生がやって来たとばかりに、硬軟関係なく暇にまかせて、ここを先途といろんなことに挑戦したが、生来の浮気性のためか、長く続くことは少ない。

そんな中、人生にある種のむなしさを感じ始めた頃に、私を救ってくれ、老後の生き方に示唆を与えてくれた歌である。

一般的にアソビは仕事との対比のなかで考え、特にツトメている時には、アソビは仕事のエネルギー源として位置づけられるものである。

ところが、リタイアすると当然のことながら、ツトメが無くなり、アソビだけの毎日となる。老後の人生とは、ツトメ中心の人生から、アソビ中心の人生に変わることである。

食事、洗濯、掃除等の妻のツトメに協力するような場合も、アソビでやる

と、新しい発見もあり、全く苦痛にならない。突きあいがちな妻とのつき合  
いも、日常の会話も、アソビにすると、腹が立つことも夫婦関係に角が立つ  
ようなこともなくなる。

楽しいことをする、のではなく、今していることを楽しむ。

“人生Ⅱアソビ”。これぞ老後のゼイタクである。

古希も過ぎ、今や七十五歳である。あつという間に十年が過ぎた。この歳  
になると時間の経つのが実に速いと感ずる。

七十五歳になると同時に、お上の仕分けにより後期高齢者に分類され、役  
所から後期高齢者医療被保険者証が送られて来る。この保険者証を見ると、  
お上から七十五歳の老人の証明書を与えられたようで、何となく不愉快な気  
分になる。が、私は、無心に遊び、戯れる子供のように、残りの人生をアソ  
ビ惚ける「光輝幸齢者」として全うしたいと願っている後期高齢者一年生で  
ある。

